

B-19 服飾意匠におけるデフォルムについて —バランシャガを中心として—

大分大 釘宮 久美

1. 服飾意匠におけるフランスの美意識を把握したいための理論展開の議論である。日本のきものが、定形を維持しながら、きこなしによって、フォルムの変様を意図した歴史を持つのに比較し、ヨーロッパの服飾は、構成のフォルムそれ自体の変容が、服飾造形の主要素をなし、美意識の反映となる。この意味におけるフォルムの取扱いに、意匠の問題点があると思われるので、それを今回は、追求してみた。

2. 現代フランスの代表的作家、バランシャガの作品を中心として、その構造線のデフォルムの様態を追求してみた。

3. 機能性の充足の中での服飾意匠の構造線による表現の方向を概観してみると、シンメトリーな形式に対して、アンバランスな形式を、オーソドックスな造形に対して、シュールレアリスムな造形を見るのであるが、更に、それは、フォルメルな造形に対して、アンフォルムな造形の存在を意味するものであり、更に、その根底には、デフォルムな創造の存在を指摘できる。それは、立体把握の美意識による造形の一方向である。